

「名」を正す

1. 原発に関する大げさな名前

原発に関する施設や施策の名前が大げさに飾られたものが少なくなく、福島原発事故が起こったのちはその傾向がさらに強くなった。

先にご紹介した例でいうと、三春町の「コミュタン福島」を併設する研究所は「環境創造センター」という¹。



図1. 福島県環境創造センター <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/298/>

同様に原発の使用済み核燃料を再処理施設で処理した後出てくる「高レベル廃棄物」を地層処分する組織を「原子力発電環境整備機構」としていることをすでにご紹介した²。このことをつとに安富歩氏が『原発危機と東大話法』などで、孔子の正名論を引き合いに出して論じていることも併せてご紹介した。

事故後福島県の避難者を少なくし、事故被害を小さく見せるために、汚染地域を大々的に除染した。そして、25基にのぼる「減容化施設」を設置して、除染土壌や放射性廃棄物を「減容化処理」した。私たちは、焼却によって容積が減ることを目的に処理しているものと思っていた。しかし、環境省の諮問委員会「第1回中間貯蔵除去土壌等の減容・再生利用技術開発戦略検討会」における環境省担当者は、次のように言っている。

¹ 「福島県環境創造センター」 <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/298/>

筆者らは、2019年3月に見学のために訪問した。「福島は今」『筒井新聞』第354号(1) <http://tsutsuineews.html.xdomain.jp/354/354-1.pdf>

² 「名は体を隠す」『筒井新聞』第352号(4) <http://tsutsuineews.html.xdomain.jp/352/352-4.pdf>

原子力発電環境整備機構が高レベル廃棄物の地層処分に向けて活発に宣伝活動「対話型全国説明会」を行っていることは <https://www.numo.or.jp/taiwa/2018/>

「減容といいますと、文字そのものから容積を減らすということになるわけであり
ますけれども、除染土壌等の場合には、容積そのものが、土の容量そのものが減ると
いうことでもございませんで、さまざまな減容技術を用いて放射能濃度の低いもの
と高いものに分ける。そのうち低いものを再生資源とすることで最終処分すべき量
を減らす。これをこの検討会あるいはこの資料における減容という言葉の使い方と
させていただければと思います」³

実際、除染土壌は焼却しても容積は減らない。除染廃棄物全量の内、可燃物はわずかに
20%程度である。そして、放射能を減らす技術はないから、従来環境中に放出しても差し
支えないとする放射性汚染物の基準 100Bq/kg としていたのを、8000Bq/kg まで管理不
要として、汚染土壌を土木工事の資源と見なして再生利用し、そのことを「減容化」の目
的とすると説明しているのである。単に除染によって集めた汚染土壌を生活圏に戻して
保管量を減らす、とだけいっているだけである。

2. 「名」を正す

孔子は、『論語』「子路篇」3 に、有名な「正名論」を述べている。貝塚茂樹の訳を引用
する⁴。

子路がおたずねした。

「衛の殿さまが先生をお引きとめして、政治を任されることになったら、何から手を
付けられましょうか」

先生が言われた。

「何よりも混乱した名を正しくしたいね」（中略）

先生が言われた。

「（中略）名目が正しくたっていないと、話の筋が通らない。話の筋が通らないと、
政治が成功しない。政治が成功しないと、礼楽つまり文化は振興しない。文化が振興
しないと、裁判が公平でなくなる。裁判が公平でないと、国民は手足を伸ばして休息
することができない。だから、君子は何か名をつけるとき、ことばではっきりわか
るようにし、そしてそれを発音すれば、必ず実行できるようにする。君子は何か発言
するにあたって、軽はずみなことはしないのだ」

³ 中間貯蔵除去土壌等の減容・再生利用技術開発戦略検討会、第1回、議事録、2015年7月21日、p.8
http://josen.env.go.jp/chukanchozou/facility/effort/investigative_commission/pdf/proceedings_150721.pdf

⁴ 『世界の名著 孔子・孟子』中央公論社、1966年、pp.259-260

これを、東洋思想の碩学、井筒俊彦氏は次のように解説している⁵。

正名、「名を正す」。勿論、「名」を「実」に向けて正しくすること、もっと具体的に言うなら、「実」にびたりと焦点を合わせた形ですべての人が「名」を使うような社会状況を作り出すことだ。そしてこの場合、決定的に重要なことは、孔子にとって、「実」とは、個体としての物ではなくて、物の「本質」を意味する、ということである。

現実の世界に存在する一切の事物、事象に、普遍的で永遠不易の「本質」があって、それが一々の物をその物たらしめるリアリティーなのだという確信が孔子にはあった。「名」はこの意味での「実」に対して志向的に制定されたもの。「名」と「実」の間には、だから、一対一の関係、一直線の関係が、本来、あるはずだ。それなのに、人間生活の現実においては、「名」と「実」の間には、大抵の場合、ずれがある。そして言語使用のこういう不正は、孔子にとって、社会秩序の紊乱を意味していた。

今日、日本政府が原発に関係して行う言説は、大言壮語するか、意図して誤解に誘導するものが多い。このこと自体が、原発政策の退廃を証明している。

⁵ 井筒俊彦『意識と本質』岩波書店、1983年、